

「医学概論」についての一考察

大 嶋 藤 三

「医学概論」は医学教育において課題としているところであるが、果して哲学の領域に属し、哲学者の責任において論議すべき性質のものなりや否やに関し、筆者は些か疑問を抱くので、この論稿において考察を試み、そのあり方を問わんとするものである。

1. 医学概論について

——澤潟久敬著「¹⁾医学と哲学」を中心として——

日本の医科大学（医学部を含む）において「²⁾医学の哲学としての医学概論」が正式に開講されたのは1941年（昭和16）の4月、（旧）大阪帝国大学医学部においてである。医学概論の開設が決定するまでには、いったい医学概論とは何かという問題について、「³⁾何回にもわたって教授会で激論が交わされた」とのことである。

当時の佐谷医学部長は講義の担当を京都大学文学部の田辺 元教授（以下田辺教授とする）を介して、その門下たる澤潟久敬講師（この時、京都大学文学部講師なり）に依嘱したのである。澤潟講師は医学概論を講ずるため、大阪帝国大学（以下大阪大学とす）の医学部の講師として昭和16年4月に赴任している。1948年（昭和23）大阪大学文学部の教授に昇格するが、混乱を避けるため、最後まで澤潟講師と呼称してまいりたい。

日本ではじめての医学概論の開講者と称される澤潟講師が、医学概論を

如何なる学問として形成せんとせしや、その意図に関し、基礎資料たる澤潟久敬著「¹⁾医学と哲学」の中に、著者の言葉に則して問うことにしたい。

「医学と哲学」は1950年（昭和25）創元社の発行で、医学の哲学、医学概論の意義等を論じた文章5篇と附録2篇をもって成り、附録とは後述の「座談会『医学概論』を語る」と「『医学概論』第二部——生命に就いて——解説」である。

なお、「医学と哲学」の中で不詳なる点は、「⁴⁾大阪大学と医学概論」（澤潟講師が教授として昭和43年大阪大学を退官する際の最終講義）、増補「医学の哲学」所載の「⁵⁾思い出」と同「⁶⁾医学の哲学——医学概論開講四十年を迎えて」等を参照いたしたい。

昭和16年4月に開講の迫った澤潟講師は医学概論なるものに関し、「講義は数日中に始めねばならぬ。併し私はその準備を始めるよりも、先づ第一に医学概論とはどんなものであるかよくわからなかった」と述べつつも、澤潟講師は一つの思量として、医学概論は医学の哲学でなければならず、また、「⁷⁾自然科学としての医学の総合ではなく、一つの独立した厳密な理論体系でなければならない」と考えていたのである。斯かる考え方を澤潟講師が有つに至った契機とその基因について筆者は探ってまいることにしたい。

澤潟講師が医学概論の講義案を練るにあたり、意見を聞き、助言を乞うたのは佐谷医学部長と田辺教授の二人である。

佐谷医学部長とは皮膚泌尿器科担当の佐谷有吉教授（1884～？）で、附属病院長を経て1940年（昭和15）に医学部長に就任している。佐谷医学部長は、「医学概論というものを始めから文科的教養的なものときめておられ、理科の学生は哲学者の文章そのものさえ十分に読みこなせないのであるから、哲学的術語なども平易に説明してもらえるといい」との意向を澤潟講師にもらしているが、この思考内容はまさに教養主義的である。

そもそも、日本に於て「教養」なる言葉は人間形成の新しい理念を意味

するものとして大正期から使用されて今日に至っているが、哲学が教養を意味し、あらゆる文化的活動の根柢に哲学があり、一切の学問の基礎は哲学であるとの解釈がとられている。

この大正期における教養主義的思潮の形成とその展開の源流は、1893年（明治26）来日の東京大学哲学科の外人教師ラファエル・ケーベル（Raphael Koeber 1848～1923）に発するが、ちなみに、ドイツにおいて、『⁹⁾教養』とは、文化的環境の手段によって魂を形成することであり、個体の陶冶を文化価値の体得を通じて普遍性にまで高まることと考え、その個人性と普遍性の内的統一を保つ全体性としての『人格』を発展させることであった。……『教養』は何よりも文芸と哲学において求められた」のである。

佐谷医学部長の意向のうち、『¹¹⁾……哲学は術語なども平易に説明してもらえるといい』と希望する心情は、決して、澤潟講師の「医学概論は哲学の講義であってよく……」の意味に繋がるものではないのである。

現在、産業医科大学では医学教育の中に「総合人間学」なる教養科目を設けていることなどから察するに、佐谷医学部長の教養主義的な考え方は依然として今日的課題である。

つぎに澤潟講師は前述の如く、医学概論を「自然科学としての医学の総合ではなく、一つの独立した厳密な理論体系でなければならない」と考えていたので、『⁸⁾それをどのようにして構成するか？……恩師田辺先生に教を乞い』に伺ったのである。

その際、『⁸⁾御自分の御病気の体験から話を始められ』た田辺教授は、『⁸⁾医者は病気を治すが病人を殺すというお話』から、『⁸⁾他の理科系の諸学者に比し多くの医学者の思索の理論的厳密さの有無の問題に触れられ』ているが、これは『¹⁰⁾医学部の学生は、他の学部の学生に比して、科学に対する正しい理解が少ない』という意味である。

要するに、田辺教授の意見として、澤潟講師の講義が『⁸⁾最後には生命哲

学に這入るとしても先づ医学部の学生に自然科学的なものをほんとうに自覚せしめるならそれだけでも」⁸⁾、澤潟講師の「仕事の存在理由は十分にある」という趣旨の助言である。仕事とは医学概論の講義のことである。

この時点で、澤潟講師も「医学の哲学は西洋の自然科学の理論的根柢の深い反省からす可きである」と考えていたので、この考え方と田辺教授による「自然科学なるものをほんとうに自覚せしめるなら……」⁸⁾という助言とが相応して、澤潟講師は「先生の御教えは私の態度を全く決定した」と述べるにいたっている。

これまで、澤潟講師が佐谷医学部長の意向と田辺教授の助言を参考にして、昭和16年4月開講の医学概論を「現代医学の根柢をなす自然科学の本質を哲学的に解明」⁸⁾することから始めた経過について論及したが、最終的には、澤潟講師は、「医学概論は哲学の講義であってよく、且つそうでなければならぬ」¹¹⁾と確然たる判断をくだしている。

筆者はここに田辺哲学の澤潟講師の哲学思想に及ぼしている深い影響を強く認めざるを得ない。

2. 田辺 元著「科学概論」との関わりについて

大阪大学医学部における医学概論の開設は決して容易なものではなく、前述のごとく、医学概論の存否とその本質論をめぐり、教授会では激論が交わされたのであるが、澤潟講師によると、「大阪大学における医学概論の発案者は久保教授で」、²⁾「それを講義として開講されたのは佐谷有吉教授が部長のときで」ある。久保教授とは基礎医学の久保秀雄氏のことで、生理学の担当である。

澤潟講師は1929年（昭和4）京都大学文学部を卒業、同大学院を経てフランスに留学し1937年（昭和12）に帰国するが、この留学中に期日はさだかでないが、澤潟講師は、奇しくも同じ留学中の久保教授（当時は助教

授)と相識り、その出遇について、「思い出」の中で、「久保教授とはいろいろのことを話し合ったが、その中で久保さんは医学教育の欠点を論じ、医学概論とでも云うべきものが必要であるとの意見を述べられたので、私はその卓見に敬服し、日本へ帰られたらぜひその実現に努力して頂きたいと大いに氏をおだてたのである」と語っている。

この対話の中で久保教授は「医学概論」という言葉を使っているが、澤潟講師によると、「この言葉は久保教授が最初に使われたのであり、それは私の恩師田辺元先生の名著『科学概論』に範を得たものであるので、私も今までそれを用いて」きていると述懐している。

さらに澤潟講師は、「私は大阪大学医学部から医学概論の講義を求められたとき、その医学概論を医学の哲学として捉えた。それは恩師田辺元博士が名著「科学概論」を科学の哲学として論ぜられたのに従ったのであり、大阪大学の医学部に医学概論の講義を創始するに当って主導的な役割を果たされた久保秀雄教授が、新しい講義に医学概論という名称を与えられたのも、その『科学概論』が教授の頭の中にあっただけからではないかと推察する」と述べているが、この文言の内容は、澤潟講師の「医学概論」構成の基底を明らかに示している。すなわち、久保教授がパリの客舎で澤潟講師に医学教育における医学概論の必要性を主張しているのは、それはまさに田辺教授の「科学概論」の理念に触発されたものである。

また、澤潟講師が田辺教授に教えを乞うた時、「自然科学なるものをほんとうに自覚せしめるなら」との助言があったが、これは「科学概論のようなことを話せば」という示唆を与えたものである。

さらにまた、前述の如く、澤潟講師が医学概論の講義に際し、「医学概論とはどんなものであるかよくわからなかった」と云いつつも「医学概論は医学の哲学でなければならない」と想定していたのは、「科学概論」の思考方法を、おのづから身につけていたものと解釈せざるを得ないのである。

茲において、筆者は「科学概論」をめぐる、田辺哲学と称される田辺教

授の哲学思想の一端について言及しておきたい。

田辺教授の哲学思想は「カントの目的論」を中心として、それ以前と以後との二つの時期に分けて考察される。ここで関連するのは、以前の時期に相当し、この書は1924年（大正3）・カント（Kant, 1724～1804）の生誕200年を記念して出版されたものである。

田辺教授（1885～1962）は1908年（明治41）東京大学哲学科を卒業の後暫らくして1913年（大正2）東北大学理学部（法文学部設立、大正11年）の専任講師として赴任している。

当時の日本のアカデミー（Akademie）の哲学において、明治30年代から大正期にかけての主潮は、新カント学派（Neukantianer）の哲学とそれを媒介とするカント哲学の研究、特に認識論を中心とするものである。

そもそも、新カント学派はカントの認識論を継承しながら二つの学派に分れ、西南ドイツ（バーデン）学派（Süd-West-deutsche od. Badische Schule）はヴィンデルバンド（W. Windelband, 1848～1915）によって創唱され、リッケルト（H. Rickert, 1863～1936）、ラスク（E. Lask, 1875～1915）等によって展開され、歴史科学ないし文化科学の基礎付けを試みている。また、一方のマールブルグ学派（Marburger Schule）の主唱者はコーエン（H. Cohen, 1842～1918）で、自然科学の基礎付けを意図し、自然の権利根拠を明らかにすることを哲学の目的としている。

東北大学理学部講師たる田辺教授は、コーエンの影響のもとに、科学の哲学的考察や数理哲学の研究を行ない、「最新の自然科学」（1915年・大正4）・「科学概論」（1918年・大正7）・「数理哲学」（1925年・大正14）等はこの時代の研究成果である。特に「科学概論」は理学部における講義をまとめたもので、序論のほか、意識の現象学的概観、論理の根本原則、数理の基本概念、経験の成立、科学の分類、自然科学の方法、自然科学の数理的方法、自然科学認識の意義の8章をもって成る。

澤潟講師の「医学概論」の成立に影響を与えた「科学概論」の基礎理念

に関し、田辺教授はつぎのように論及している。

田辺教授によれば、科学概論とは philosophy of science, Philosophie der Wissenschaft の訳語であり、「科学の哲学」の意味に科学概論という語を用いるが、要するに、科学概論とは「科学の哲学」、くわしくは「科学の哲学的考察」という意味である。

また、科学概論と称した場合、「¹⁶⁾凡ての科学研究を通覧して其結果を更に概括統一するものというように解せられる」が、「¹⁶⁾諸科学は夫々特殊の基礎方法の上に立つものであるから、其研究の結果を唯綜合するというのが如きことは出来るものではない」との意見である。この科学概論の定義はそのまま澤潟講師の「医学概論」に転用されている。

澤潟講師の「医学概論」を支えている新カント学派の哲学理念に関し、田辺教授は、「1860～70年代以後カントの精神を復興し、哲学の職分を専ら批判に求めようとする」ものであり、したがって、「新カント派に属する現代の哲学は……哲学の中心問題を批判にありとするもの」だとの説明を与えている。

これまでの論述によって、澤潟講師の「医学概論」の根本思想は田辺教授の「科学概論」、すなわちマールブルグ学派の哲学思想に依拠していることが明らかになったが、「科学概論」の存在意義を考える場合、「最近の自然科学」執筆の意味は重要となる。前述の如く、この「最近の自然科学」は「科学概論」刊行の3年前の大正4年に岩波哲学叢書の一冊として、紀平正美著「認識論」とともに同年刊行されている。

田辺教授の「科学概論」がもし科学の哲学であるならば、「最近の自然科学」こそは、科学哲学ならざる、一般の意味での科学概論（自然科学を中心とするものであるが）にあたるのではないかと筆者は考えたい。

田辺教授の「科学概論」に即し、医学の哲学と称する澤潟講師の「医学概論」が、“医学概論”と自称する限り、筆者はなかなか納得でき難いのである。

3. H. E. ジーゲリスト「医学序説」と高山坦三著「医の哲学」 に問う

筆者ははじめにH. E. ジーゲリスト (Henry E. Sigerist) の「医学序説」(Einführung in die Medizin, 1931) にその思想を問い医学概論のあり方を考える参考にいたしたい。

訳者は北海道大学医学部外科教室の高山坦三医学博士（以下高山博士とする）で、1943年（昭和18）の出版である。この訳書は1941年（昭和16）戦陣¹⁷⁾の中で訳出され始めているが、昭和16年と云えば、哲学専攻の澤潟講師が大阪大学で医学概論開講の年である。場所を異にするも、年代を同じうして、對遮的な二つの医学思想の展開のあった事実は比較討究のうえから日本の医学教育において特記さるべきことである。

昭和16年という同じ時期に外科医の高山博士がH. E. ジーゲリストの「医学序説」訳出の作業を媒介として、医哲学と医師の道德を探し求め、「その内容が、その頃わたくしの頭の中を去来していた医哲学と医師道德¹⁸⁾に関するわたくしの觀念と一致するところがあった」という言葉に筆者は関心を拂いたい。

H. E. ジーゲリストはドイツ・ライプツイッヒ大学医学部医学史教室の教授で、「医学の哲学的限界問題」¹⁹⁾等の著書がある。

「医学序説」の全容は上・下巻7項目より成り、「序言」を除き、上巻は人間（人間の構造・機能・心と精神）、病者、疾病の徴候、疾病の4項目で、下巻は疾病の原因、医療（診断・治療・予防）、医師の3項目である。

H. E. ジーゲリストははじめに人間と病者を課題とし、疾病と治療の問題をその間で扱い、医師論で最後をくくっている。

医師と病者の関わりこそ重要な人間的課題である。H. E. ジーゲリストは医師について論じ、「医師の思考と行為とが関与するものは人間である。²⁰⁾……人間についてのこの純自然科学的觀察をもって医師は満足するこ

とを許され」ず、「人間を精神的存在として把握」し、「常に人間全体を、生活状況の全体を対象とせねばならぬ」と同時に、医師は疾病の意味、生死の意味など「形而上学の問題を取扱う権利を否認することは許されない」ものだとして強く主張している。

H. E. ジーゲリストは医学史の教授として「医学序説」の執筆に際し、医学と医学の使命に関する根本概念を理解せしむるために、「歴史を手段として、充分利用」し、「そのものの起源に関心をもたしめる」方法を取り、医学教育における医学史の重要性に説き及んでいる。

高山博士は訳者として、「医学序説」の内容は「医学史の文化的発展がすべての項において企てられて」あり、またその内容が新鮮なること（昭和18年の時点で）などから、「医学序説」を「反復読むべき書」と推奨し、日本では「医哲学はまだきわめて幼稚である」ので、「この種のものはもっともっと出なければならない」との見解を披瀝している。

これまで、H. E. ジーゲリストの「医学序説」に医学概論のあり方を問うてきたが、さらに、筆者は高山坦三博士の著書「医の哲学」の中における、医と医学の両概念の意義を明らかにしてまいりたい。

「医の哲学」の「序」の執筆の日が「昭和17年11月5日 北支にて」とあるので、察するにそれ以前に執筆投稿した論稿をまとめ、「医の哲学」と題し昭和18年4月に出版したものである。これら論稿の随処にH. E. ジーゲリストの思想の影響の陰影をみる。

「医の哲学」の内容は「序」のほか、医哲学、医随想、医史に関する論稿の3ヶ章より成る。医哲学の章は医学の概念、医学の基礎概念、医学の表象に就いて、医の概念、医の解明の5節に分けて論じ、医道、病氣と病人、医の本質等の医に関する諸問題は「医随想」の章でとりあげている。

高山博士は、所謂医学に関わる論議の際、「医」Medizinと「医学」medizinische Wissenschaftの両概念が判然と把握されず、「医」は「医学」と殆ど同義語として使用され、また「我々は今尚『医学』なる概念をもつ

て「医」を代表せしめつつ一般に使用」し、「そのまま哲学的思考のうちに持ちこまれる時、そこに大きな思索の混乱をきたす」ので、十分なる認識を持つべきであると主張し、また、人類史的には原初にまづ「医」があり、「²⁵⁾『医』は医学と言われつつ「術」と「学」とに分化し、この学は更に諸分科に分化したもの」と解釈している。要するに、高山博士によれば、「²⁶⁾医の概念のうちに、学としての医学と術としての医術の二つの概念」が存し、医術の哲学が実践として医道と呼ばれる形態をとるのである。さらに「²⁷⁾『医道とは医学には存しないが、「医」そのものの中に a priori に予想されねばならぬ理念で」あり、かかる理念は学としての医学には存しないのである。

すなわち「²⁸⁾医道はただ単なる医たる者への戒めの言葉ではなく、医が医たり得べき根源的制約」なのである。

これまでの論述によって明らかな如く、高山博士は、「医」と「医学」の概念の区別を明確にすると同時に、学と所謂医のモラルとのあるべき態様の確立の必要性に強く説き及んでいる。

高山博士の所論は決して異論ではなく、その趣旨は（つぎの節で論ずる予定の）「²⁹⁾『医学概論』を語る座談会」の席上における佐々貫之教授（後述）と三浦岱栄病院長（後述）との対話の中で論ぜられるところである。佐々教授が、「³⁰⁾私は病気を治すのでなく病者を治すと云う。病者を治すとは人を取扱うので道德の問題となる。それで医学と云わずに医と云う。医とは何ぞやとなるともっと広くなる」と述べたのに対し、三浦病院長は、「³⁰⁾……医学概論の中で、メディカル・サイエンスとメディシーンという言葉を外国のように教うべきである。メディカル・サイエンスの中に倫理・価値観は入って来ない。メディシーンではどうしても必要になってくると応答し、両者は、「医」と「医学」の概念の区別に関し意見を同じうしているのである。

4. 「医学概論」担当の諸問題について

澤潟講師は昭和20年10月に、昭和19年度の講義案を「医学概論第一部 科学に就いて」と題し、東京創元社より出版している。

その内容は「まえおき」のほか、序論「医学概論の進む道」、本論第一部「科学に就いて」の二つに分れ、本論はつぎの8項目——1. ロゴスとパトス——真理への意志、2. 実証科学、3. 実験、4. フィジックとメタフィジック、5. 延長の自然学、6. 古典的物理学、7. 現代の物質観、8. 実證と直観——より成る。まったくの科学論と称すべきである。

「¹⁾医学概論とは耳新しい言葉で、医学総論と区別のはっきりしない人」はもとより、「¹⁾医学概論などと云うものがあるのかと云う人」さえもある時代の昭和23年2月、澤潟講師の「医学概論」の出版を契機とし、「³²⁾『医学概論』を語る座談会」（以下『座談会』とする）を内科懇談会が日本医師会館で開催している。稲田龍吉教授（東京大学・内科学）を議長とし、渡辺定博士（社会医学研究会）が会の準備と進行を担当している。参加者は医学者25名、哲学者1名（東京女子医大、高桑純夫教授）の計26名である。なお、以下参加者の職名は昭和23年当時のものそのままである。

提出議題は、医学を学ぶ者に「医学概論」が必要か、「医学概論」の定義、「医学概論」の内容と方向、の3題である。

討議資料として提出された「医学概論」内容試案甲・乙はつぎのとおりである。

（甲案）は医師の世界観、医学とは何ぞや、医のあり方、体質と疾病論の4項目（各項目はそれぞれ細分さる）から成り、医学概論としては、哲学や倫理学（Ethik）だけでなく、医学の根本的事項を教えんとする意図である。甲案はまさしく澤潟講師の「医学概論」に対するアンチテーゼ（antithese）であり、後述の佐々貫之・懸田克躬編「医学概論」の構想に収斂されてゆく内容である。

(乙案)は哲学概説、科学論(科学と哲学)、生命論、医学論の4項目より成り、医学概論を哲学の考察から進めんとするもので、澤潟講師の「医学概論」に相当し、座談会出席の医学者たちにはなじまないものである。

これらの提出議題と「医学概論」内容試案は、進行係の渡辺博士が東京大学の佐々貫之教授(内科学)、同緒方富雄助教授(血清学)、慈恵医大の浦本政三郎教授(生理学)三氏の意見を総合してまとめたものであるが、「座談会」論議内容とともに、27年を経過した現在もなお、その新鮮さは現実性を失わず、医学教育のあり方が問われている今日、依然として貴重な資料と云うべきである。

ここで筆者は、「医学概論」の講義を担うものは誰かという課題を解くべく、「座談会」論議の中に、前述の三浦岱栄院長(元慶応大学医学部精神科助教授で、東京桜町病院に出向中)にその意見をまづ問うことにしたい。

三浦院長は、³⁴⁾医学概論の講義(または著述)を哲学者と医学者によるものとに区別し、医学者による場合、基礎医学と臨床医学それぞれよりの担当者の二つに分けて論じている。

澤潟講師の「医学概論」を論議の中心に据えた三浦院長は、³⁴⁾「医学の事を本当に知らない人が医学概論をやることは一体適当であるかどうか」との疑問を投げかけると同時に、「基礎医学者が医学概論をやる場合にすらその問題がある」との意見を自らの体験に基づいてつぎのように語っている。

クロード・ベルナール(Claude Bernarl, 1813~1878)の「実験医学序説」の訳出(1838年・昭和13)者たる三浦院長は、この訳書は、³⁴⁾「イントロダクション」という字が附いているので、一種の医学概論と考えて良いし、また、基礎医学教室当時は非常によいものと考えられたが、そこを出て臨床医学に長く携った後に読み直すと、「やはり基礎医学の人が常に云っている医学概論にすぎない」という感じを受けたとの感想をもらしている。

しからば、医学概論を担う者(講義にしる、著述にしる)は誰かという

事になるが、前記「座談会」での議論内容は多様に展開されている。

医学に携らぬ人は別として、医学者が医学概論の講義を担当する場合、基礎医学・臨床医学それぞれに問題はあるが、「本当にその方が勉強され、³⁵⁾矢張りクリニックも知って居る人でないとピンと来ないと思う」、「³⁵⁾もし具体的に見つけるとすれば生理・病理・臨床というところでしょう」、「純学問的な立場に立って居ながら、扱う面に於てヒューマニズムが出て来るので、矢張り臨床家の方がよいのではないか」等々の意見が討議されている。

高桑教授は哲学者の一人として、「³⁶⁾医学概論というものがもし本当の意味に於て有効に行なわれ」るならば、「臨床の方並に基礎の方」こそがふさわしいとの考え方である。

かくて、問われてくるのは「医学概論」構成の思想と内容の問題である。大方の医学者にとって、医学概論乙試案には賛成できず、医学者の手による医学概論こそが求められていると考うべきである。

5. 医学概論のあり方について

昭和26年に至り、佐々貫之・懸田克躬（順天堂大学・精神医学）両教授を編者とする「³⁷⁾医学概論」が南山堂より出版されている。

この書の出版は、昭和16年大阪大学医学部で、日本最初と称される「医学概論」を、哲学者の澤潟講師が講義して以来10年の歳月を経過している。

この年の前年にあたる昭和25年以来、横浜市立医科大学では、石原明講師が医史学を講義しており、講義案が「⁴¹⁾医史学概説」として出版されたのは昭和30年である。著者は医史学に関し、「序説」の中で、「医史学とは医の史的展開を究め、これを通じて医学とは何であるかという本質を認識することを目的とする医学の1分科である。従って医史学の究極の目的は医学概論に通ずる」と述べているが、この見解は前記H. E. ジーゲリストの思想にも脈絡し、医学概論の構成にとり重要な見解なることをここで確

認しておきたい。

さて、佐々・懸田編「医学概論」の編集の契機であるが、編者は「序」文の中で「医学を全体として考察する」ためと規定し、その前提が「われわれは医の世界の個々のことについては、まことにさまざまに知りもし、かつ学びもしている。しかしそれらのすべてを包んでいる医的な世界全体については餘りにも知らないことに気づかないわけにはゆかない」との認識である。この認識こそが、佐々・懸田編「医学概論」発想の原点である。

編者によると、当時の日本の医学界では「³⁷⁾そのような学問としての医学概論」は重視されず、また医学概論の名を冠した講義や著書があっても、「まだ、講義には一定の体系もなく、後者もまだ一の特殊な科学論に止まる」とあるが、この「一の特殊な科学論に止まる」とは、明らかに、医学者として、澤瀉講師の「医学概論」に対する厳しい批判である。

佐々・懸田編「医学概論」の編集にあたり、佐々教授は前記「座談会」の企画者の一人でかつ議題・資料の提供者である故、「座談会」討議の諸意見は十分に参照されたものと考えられる。

この「医学概論」は医学を全体として考察するため、編者2名を含めた12人の医学者を執筆者とし、専門の部門ごとの分担である。

澤瀉講師の「医学概論第一部 科学に就いて」の内容と比較するため、佐々・懸田編「医学概論」の構成を簡単に述べたい。

この「医学概論」は4章より成り、第一章は“医学と医療の概念”で、医的な世界、医学の生いたち、科学的医療と民間医療法、医療の対象、医学の構成と隣接科学、診療の6項目に分けられ、第Ⅱ章と第Ⅲ章はそれぞれ、形態と機能の学問、治療と豫防の学問にあてられている。第Ⅳ章では、とくに日本の医学の生いたちと各国の医学教育の実情について論じられている。

この「医学概論」において、注目すべきは、医学史すなわち、医学の生いたちや日本の医学史などについて説き及ぶとともに、医学にまつわる混

乱を防ぐために、「医」と「医学」の両概念の区別を規定している。

すなわち、「医療 medical care (medizinische Praxis)」と「医学 medical science (medizinische Wissenschaft)」とを、「この両者を含むものとしての医または広義の医学 medicine (Medizin)」から判然と区別のうえ論を進めている。

この概念規定は前述の高山博士の所説の趣旨と同じく、また前記の「座談会」でも論証されていることで、医学概論を構築する場合、不可欠の前提と考うべきである。

さらに、この「医学概論」の編者は、「医的な世界」の項で、医学が関わる人間の問題の限界について言及している。そもそも、医学の「人間理解³⁹⁾は人間存在の深い一面を明らかにするものである」にも拘らず、その一面性を免れず、真の人間理解のためには「哲学的人間理解³⁹⁾にまつべきもの」なることを明確にし、人間を実存として捉え、また人間は存在の問題として理解さるべきことを提言しているが、この提言は“医的な世界”の問題として深い思索にゆだねらるべき永遠の課題である。

これまでの説明によって明らかな如く、佐々・懸田編「医学概論」は医の世界の個々のことは沢山知っていても、「医的な世界全体については餘りにも知らない」という自覚のもとに、「医学を全体として考察する」ことを主眼とする医学者の手になる医学概論であって、澤潟講師の「医学概論」の如く、「医学概論とは医学の哲学であって、医学の哲学とは医学の反省である」という問題意識に立たないものである。

筆者は佐々・懸田編「医学概論」は現在是不充分なものであるかも知れないが、この「医学概論」のあり方の方が、医学概論としては常道なものと考えたい。

茲に、社会科学の分野なるも尾高朝雄教授（故人）の「法学概論」の例をあげて参考にしたいと思う。

法哲学者の尾高朝雄氏(1899～1956)は東京大学教授として、1949年

(昭和24)に「法哲学概論」を日本評論社より出版するとともに、同年「法学概論」を有斐閣全書の1冊として出版している。

尾高教授は「法学概論」の「はしがき」の中で私は或る点までラートブルッフ (Gustav Lambert Radbruch 1878~1949) の法学概論 (Einführung in die Rechtswissenschaft 1910) を手本にしつつ、できるだけわかりやすく、「日本の、近代の、主要な法領域の問題を概観することにつとめた。……三十年前の自分がいまの自分であったならば、この道をこうも歩いたであろうという一つの記録として……。 (中略) 一般的にいえば、この本の問題のとらえ方は、大体として各所にふれているつもりである。それ故、この本を読まれる方々には、この本を頼りにして法学の「知識」を得るというよりも、これによって法学の生きた「問題」をつかむという態度ですまれることを特にお願いしておきたい」とある。この「はしがき」の趣意は、医学概論に関するあり方としての一つの方向を示唆しているものと筆者は考えたい。

——おわりに——

これまでの論述によって明らかになった如く、筆者は医学概論としては、澤潟講師による「医学概論」の理念に與し得ず、佐々・懸田編「医学概論」の構想を適正なものとし、かつ、それは医学者の責任において講義されまた執筆・編集さるべきものとする。

澤潟講師は、1980年 (昭和55) の「医学の哲学——医学概論開講四十年を迎えて——」の論述の中で、⁶⁾「医学概論は哲学者によってではなく、医学者によって形成されねばならぬ」と述べつつも、なお、「医学の哲学とは医学の反省である以上、先づ医学を身につけることは絶対に必要であり、医学を知らずして医学の哲学はあり得ない」との意見を堅持している。医学者ならざるものが、如何に多くの医学知識を身につけても、やはりそれは

医学者そのものとは異なるものである。

澤潟講師の「医学概論」における「医学概論は医学の哲学であり、医学の哲学は医学の反省である」との立場は、新カント学派の認識論を基調とする哲学理念より脱しない限り、飽くまでその呪縛の中に止まることになる。学問の基礎は哲学なるが故に、まず哲学を学ぶべしとの哲学論は、論理的順序と時間的順序とを取り違えており、論理的には哲学が先かも知れないが、医学生はまず実証科学をしっかりと身につけつつ、その過程で、哲学することを悟るべきである。

したがって、科学論、生命論等は医学部学生のための哲学概論（あるいは原論）としてその中で特論として論じらるべき性質の問題である。

あとに残るのは医のモラルであるが、観念的に説かるることによって、解決さるべくもない永遠の人生的課題である。最近における臓器移植、脳死等に関わる医の倫理の問題とともに、この論稿の課題のそとである。

- 注 1) 澤潟久敬「医学と哲学」創元社 1950
2) 同 上 P. 14
3) 澤潟久敬「医学の哲学増補」P. 214 誠信書房 1964
4) 澤潟久敬「医の倫理」P. 184 誠信書房 1971
5) 澤潟久敬増補「医学の哲学」 P. 213 誠信書房 1964
6) 同 上 P. 241 誠信書房 1964
7) 澤潟久敬「医学と哲学」P. 31 創元社 1950
8) 同 上 P. 32 創元社 1950
9) 日本近代哲学史 宮川 透・荒川幾男編 P. 206 有斐閣 1976
10) 澤潟久敬「医学の哲学」増補 P. 215 誠信書房 1964
11) 澤潟久敬「医学と哲学」P. 33 創元社 1950
12) 澤潟久敬「医の倫理」P. 188 誠信書房 1971
13) 澤潟久敬「医学の哲学」増補 P. 232 誠信書房 1964
14) 澤潟久敬「医学の哲学」増補 P. 242 誠信書房 1964
15) 田辺 元著「カントの目的論」岩波書店 大正13年「序」「此書の内容は本年四月のカント生誕満二百年を記念する為めに私の起草した一著の論文を以て成る」
16) 田辺 元「科学概論」P. 1～P. 37 岩波書店 大正13年 第1版

昭和14年 第21版

- 17) H. E. ジーゲリスト訳書「医学序説」訳者「序」人文閣 1943
「……昭和16年の北支における最大な作戦である中原会戦の最中」のこと
- 18) H. E. ジーゲリスト訳書「医学序説」訳者「序」P. 1 人文閣 1943
- 19) Philosophische Grenzfragen der Medizin
- 20) H. E. ジーゲリスト訳書「医学部序説」上巻 P. 2 人文閣 1943
- 21) H. E. ジーゲリスト訳書「医学部序説」上巻 P. 104 人文閣 1943
- 22) H. E. ジーゲリスト訳書「医学部序説」上巻 序言 P. 5 人文閣 1943
- 23) H. E. ジーゲリスト訳書「医学部序説」上巻 訳者「序」P. 3~4 人文閣 1943
- 24) 「醫の哲学」P. 37 人文閣 1943
- 25) 「醫の哲学」P. 10 人文閣 1943
- 26) 「醫の哲学」「序」P. 11 人文閣 1943
- 27) 「醫の哲学」P. 87 人文閣 1943
- 28) 「醫の哲学」P. 5 人文閣 1943
- 29) 澤瀉久敬「医学と哲学」P. 76 創元社 1950
- 30) 澤瀉久敬「医学と哲学」P. 115 創元社 1950
- 31) 澤瀉久敬「医学概論第一部 科学に就いて」創元社（東京）1945
- 32) 澤瀉久敬「医学と哲学」P. 76~121 創元社（東京）1945
- 33) 澤瀉久敬「医学と哲学」P. 78~80 創元社（東京）1945
- 34) クロード・ベルナール, 三浦岱栄訳「実験医学序説」岩波文庫 1938
- 35) 澤瀉久敬「医学と哲学」P. 112~113 創元社 1950
- 36) 澤瀉久敬「医学と哲学」P. 102 創元社 1950
- 37) 佐々貫之・懸田克躬編「医学概論」序, 目次 南山堂 1961
- 38) 佐々貫之・懸田克躬編「医学概論」P. 2 南山堂 1961
- 39) 佐々貫之・懸田克躬編「医学概論」P. 3~4 南山堂 1961
- 40) 尾高朝雄「法学概論」有斐閣 1961
尾高朝雄「法哲学概論」日本評論社 1949
- 41) 石原 明「医史学概論」医学書院 1955

参 考 文 献

- 1) 澤瀉久敬「医学と哲学」 創元社 1950
- 2) 澤瀉久敬「医学概論第一部 科学に就いて」東京創元社 1945
- 3) 澤瀉久敬「医学概論第二部 生命に就いて」大阪創元社 1949
- 4) 澤瀉久敬「医学概論第三部 医学に就いて」大阪創元社 1960
- 5) 澤瀉久敬 増補「医学の哲学」誠信書房 1964
- 6) 澤瀉久敬「医の倫理——医学講演集」誠信書房 1971
- 7) 澤瀉久敬「健康を考える その他」第三文明社 1976
- 8) 澤瀉久敬「医学と生命」東京大学出版会 1979
- 9) 田辺 元「科学概論」岩波書店（第一刷）1918
- 10) 山口興市「医のこころ」やさしい医学概論 日本評論社 1977
- 11) H. E. ジーゲリスト著 高山坦三訳「医学序説」人文閣 1943
- 12) 高山坦三「医の哲学」人文閣 1943
- 13) 佐々貫之・懸田克躬編「医学概論」南山堂 昭和26年——1951
- 14) クロード・ベルナル著 三浦岱栄訳「実験医学序説」岩波書店
（第一刷）1938
- 15) カール・ビンガー著 懸田克躬訳「新しき医学への道」創元社 1950
- 16) ニコラス・ロゲン「医学と倫理」エンデレ書店 1948
- 17) 森 信胤編「生理学ヲ中心トシタ医学史」河合書店 1941
- 18) 小川政修「西洋医学史」眞理社 1952
- 19) 石原 明「醫史学概説」医学書院 1955
- 20) 宮川 透・荒川幾男編「日本近代哲学史」有斐閣 1976
- 21) 古田 光・鈴木 正編「近代日本の哲学」北樹出版 1983
- 22) 生松敬三「現代日本思想史」4 大正期の思想と文化 青木書店
1971
- 23) 柱 寿一「哲学概説」東京大学出版会 1976
- 24) 西谷啓治編「現代日本の哲学」雄渾社 1967
- 25) 中村 元・山田 統編「世界思想教養辞典」東京堂 1977
- 26) 尾高朝雄「法学概論」有斐閣 1961
- 27) 尾高朝雄「法哲学概論」日本評論社 1949
- 28) 木村亀二「近代法思想の人々」日本評論社 1971